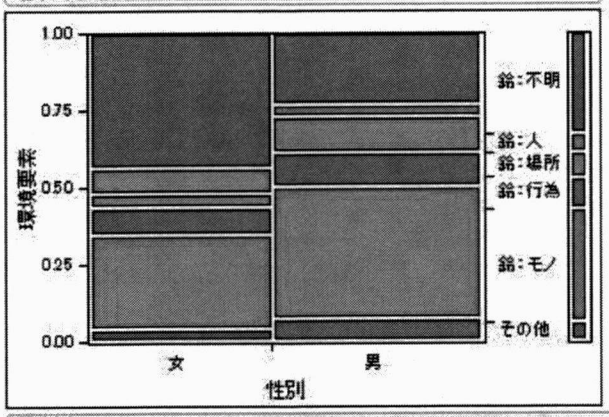
性別と環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

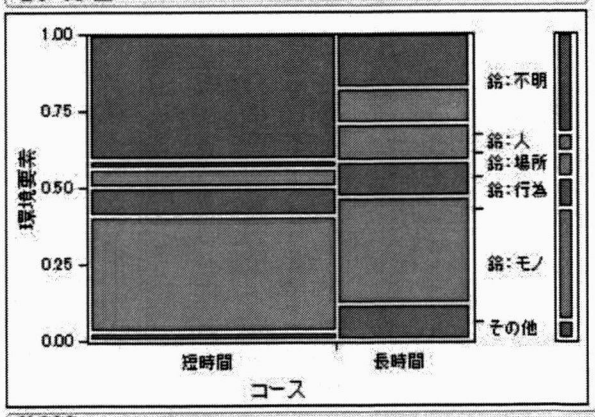
環境要素

性別	度数 全体% 列% 行%	その他	鈴:モノ	鈴:行為	鈴:場所	鈴:人	鈴:不明	
	女	1 2.04 33.33 4.35	7 14.29 38.89 30.43	2 4.08 40.00 8.70	1 2.04 25.00 4.35	2 4.08 66.67 8.70	10 20.41 62.50 43.48	23 46.94
	男	2 4.08 66.67 7.69	11 22.45 61.11 42.31	3 6.12 60.00 11.54	3 6.12 75.00 11.54	1 2.04 33.33 3.85	6 12.24 37.50 23.08	26 53.06
		3 6.12	18 36.73	5 10.20	4 8.16	3 6.12	16 32.65	49

性別と環境要素

コースと環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

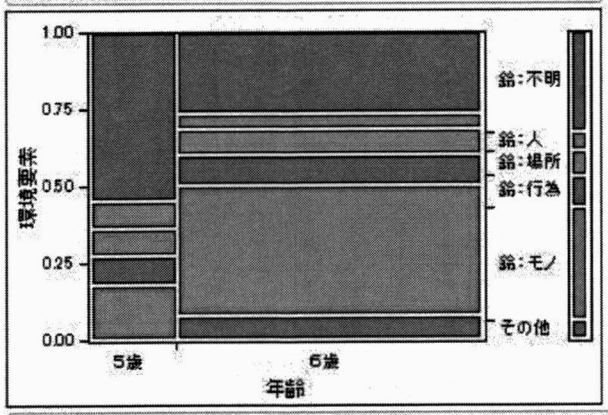
環境要素

コース	度数 全体% 列% 行%	その他	鈴:モノ	鈴:行為	鈴:場所	鈴:人	鈴:不明	
	短時間	1 2.04 33.33 3.13	12 24.49 66.67 37.50	3 6.12 60.00 9.38	2 4.08 50.00 6.25	1 2.04 33.33 3.13	13 26.53 81.25 40.63	32 65.31
	長時間	2 4.08 66.67 11.76	6 12.24 33.33 35.29	2 4.08 40.00 11.76	2 4.08 50.00 11.76	2 4.08 66.67 11.76	3 6.12 18.75 17.65	17 34.69
		3 6.12	18 36.73	5 10.20	4 8.16	3 6.12	16 32.65	49

所属コースと環境要素

年齢と環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

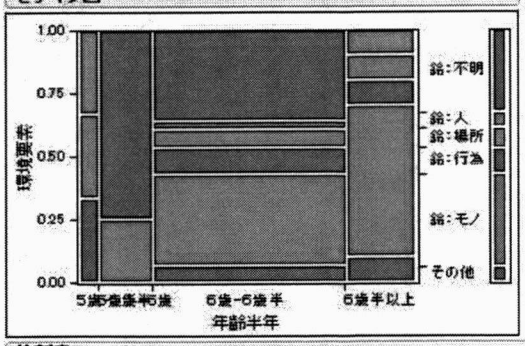
環境要素

年齢	度数 全体% 列% 行%	その他	鈴:モノ	鈴:行為	鈴:場所	鈴:人	鈴:不明	
	5歳	0 0.00 0.00 0.00	2 4.08 11.11 18.18	1 2.04 20.00 9.09	1 2.04 25.00 9.09	1 2.04 33.33 9.09	6 12.24 37.50 54.55	11 22.45
	6歳	3 6.12 100.00 7.89	16 32.65 88.89 42.11	4 8.16 80.00 10.53	3 6.12 75.00 7.89	2 4.08 66.67 5.26	10 20.41 62.50 26.32	38 77.55
		3 6.12	18 36.73	5 10.20	4 8.16	3 6.12	16 32.65	49

年齢（一年毎）と環境要素

年齢半年と環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

環境要素

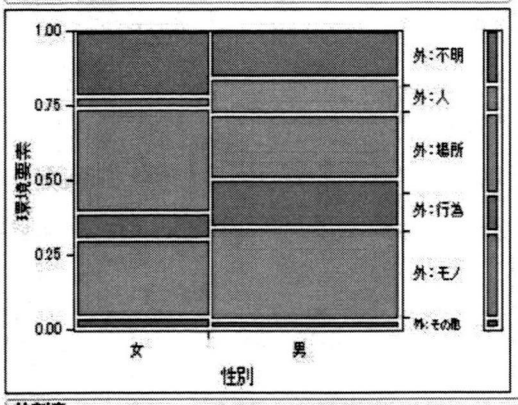
年齢半年	度数 全体% 列% 行%	その他	鈴:モノ	鈴:行為	鈴:場所	鈴:人	鈴:不明	
	5歳-5歳半	0 0.00 0.00 0.00	0 0.00 0.00 0.00	1 2.04 20.00 33.33	1 2.04 25.00 33.33	1 2.04 33.33 33.33	0 0.00 0.00 0.00	3 6.12
	5歳半-6歳	0 0.00 0.00 0.00	2 4.08 11.11 25.00	0 0.00 0.00 0.00	0 0.00 0.00 0.00	0 0.00 0.00 0.00	6 12.24 37.50 75.00	8 16.33
	6歳-6歳半	2 4.08 66.67 7.14	10 20.41 55.56 35.71	3 6.12 60.00 10.71	2 4.08 50.00 7.14	1 2.04 33.33 3.57	10 20.41 62.50 35.71	28 57.14
	6歳半以上	1 2.04 33.33 10.00	6 12.24 33.33 60.00	1 2.04 20.00 10.00	1 2.04 25.00 10.00	1 2.04 33.33 10.00	0 0.00 0.00 0.00	10 20.41
		3 6.12	18 36.73	5 10.20	4 8.16	3 6.12	16 32.65	49

年齢（半年毎）と環境要素

図表Ｃ９　音クイズ回答分析結果：Ｅ 風鈴の音

性別と環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

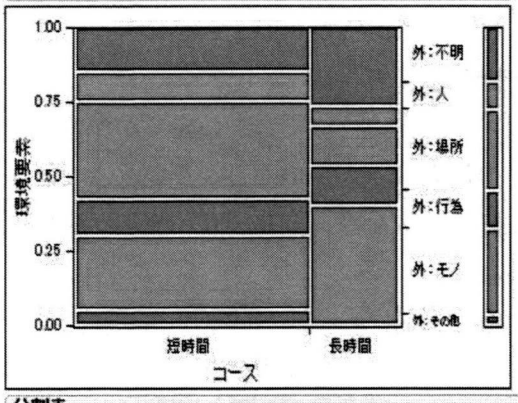
環境要素

性別	度数 全体% 列% 行%	外:その他	外:モノ	外:行為	外:場所	外:人	外:不明	
女		1	6	2	8	1	5	23
		1.82	10.91	3.64	14.55	1.82	9.09	41.82
		50.00	37.50	28.57	53.33	20.00	50.00	
		4.35	26.09	8.70	34.78	4.35	21.74	
男		1	10	5	7	4	5	32
		1.82	18.18	9.09	12.73	7.27	9.09	58.18
		50.00	62.50	71.43	46.67	80.00	50.00	
		3.13	31.25	15.63	21.88	12.50	15.63	
		2	16	7	15	5	10	55
		3.64	29.09	12.73	27.27	9.09	18.18	

性別と環境要素

コースと環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

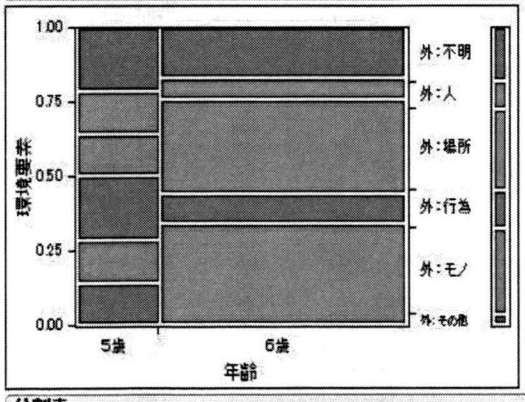
環境要素

コース	度数 全体% 列% 行%	外:その他	外:モノ	外:行為	外:場所	外:人	外:不明	
短時間		2	10	5	13	4	6	40
		3.64	18.18	9.09	23.64	7.27	10.91	72.73
		100.00	62.50	71.43	86.67	80.00	60.00	
		5.00	25.00	12.50	32.50	10.00	15.00	
長時間		0	6	2	2	1	4	15
		0.00	10.91	3.64	3.64	1.82	7.27	27.27
		0.00	37.50	28.57	13.33	20.00	40.00	
		0.00	40.00	13.33	13.33	6.67	26.67	
		2	16	7	15	5	10	55
		3.64	29.09	12.73	27.27	9.09	18.18	

所属コースと環境要素

年齢と環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

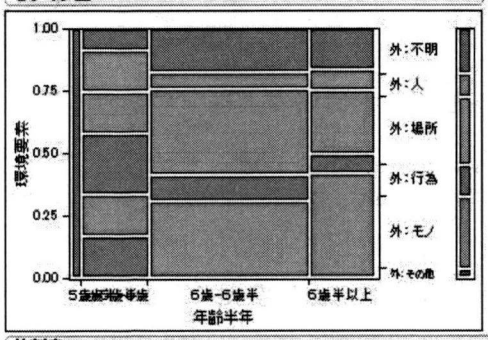
環境要素

年齢	度数 全体% 列% 行%	外:その他	外:モノ	外:行為	外:場所	外:人	外:不明	
5歳		2	2	3	2	2	3	14
		3.64	3.64	5.45	3.64	3.64	5.45	25.45
		100.00	12.50	42.86	13.33	40.00	30.00	
		14.29	14.29	21.43	14.29	14.29	21.43	
6歳		0	14	4	13	3	7	41
		0.00	25.45	7.27	23.64	5.45	12.73	74.55
		0.00	87.50	57.14	86.67	60.00	70.00	
		0.00	34.15	9.76	31.71	7.32	17.07	
		2	16	7	15	5	10	55
		3.64	29.09	12.73	27.27	9.09	18.18	

年齢（一年毎）と環境要素

年齢半年と環境要素の分割表に対する分析

モザイク図



分割表

環境要素

年齢半年	度数 全体% 列% 行%	外:その他	外:モノ	外:行為	外:場所	外:人	外:不明	
5歳-5歳半		0	0	0	0	0	2	2
		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3.64	3.64
		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	20.00	
		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	
5歳半-6歳		2	2	3	2	2	1	12
		3.64	3.64	5.45	3.64	3.64	1.82	21.82
		100.00	12.50	42.86	13.33	40.00	10.00	
		16.67	16.67	25.00	16.67	16.67	8.33	
6歳-6歳半		0	9	3	10	2	5	29
		0.00	16.36	5.45	18.18	3.64	9.09	52.73
		0.00	56.25	42.86	66.67	40.00	50.00	
		0.00	31.03	10.34	34.48	6.90	17.24	
6歳半以上		0	5	1	3	1	2	12
		0.00	9.09	1.82	5.45	1.82	3.64	21.82
		0.00	31.25	14.29	20.00	20.00	20.00	
		0.00	41.67	8.33	25.00	8.33	16.67	
		2	16	7	15	5	10	55
		3.64	29.09	12.73	27.27	9.09	18.18	

年齢（半年毎）と環境要素

図表Ｃ１０　音クイズ回答分析結果：Ｆ 屋外オルゴール音

2）性別

男児は“場所”や“行為”に関する回答が、女児は“人”に関する回答が多い。

3）施設滞在時間

短時間滞在の幼児には“モノ”の発言が多く、長時間滞在の幼児は”人”の回答が多い。また、短時間滞在では意味を汲み取りづらい表現が多い傾向が見られた。

4）年齢（一年毎）

５歳児は“行為”についての回答が多いが、６歳児は“不明”の多さに見られるよう、曖昧な回答が多い。

5）年齢（半年毎）

６歳半以上では具体的な回答が多く、音源からは推測し難い“場所”についての回答が多い点が特徴的である。６歳ー６歳半では他と比較して“行為”についての回答が少なく、“モノ”についての回答や“不明”が多い点が特徴的である。

【D セロハンテープを千切る音】

1）全体

実験者によって作成された音源で、実環境での音とは異なるものの、幼児の正答率も極めて高く、“モノ”や“行為”といった言葉として具体的な回答が多く得られた。実際の環境における音の中でも、他の音と比較して物理的指標である音圧レベルで測定された値以上に幼児にとっては印象的な音であることが推測される。制作のコーナーで自分自身の行為によって発せられた音として、大人が感じる以上に強く認識されていることが示唆された。

2）性別

男児のみ“場所”の回答が見られたが、全般的に大きな差異は見られない。

3）施設滞在時間

短時間滞在の幼児には“場所”の発言が見られたが、大きな差は見られない。また、長時間滞在の幼児の方が”不明”が少なく、“モノ”での回答が多いことに挙げられることから、具体的に回答しようとする傾向が見られた。

4）年齢（一年毎）

大きな違いは見られないが、６歳児になると発話のバリエーションが増える傾向が見られた。

5）年齢（半年毎）

６歳半以上は“モノ”での回答が多い傾向が見られる。５歳ー５歳半だと回答のバリエーションが少ない。

【E 風鈴の音】

1）全体

対象としていた音源が人間の活動とは直接的にかかわりのない風鈴であるので、幼児の回答にも“モノ”が多く見られた。また、園では類似した音として鉄琴の音のなる玩具が置かれていることもあり、季節的な意味づけとしての「風鈴」という回答は少なかった。“不明”が多い傾向となったのは、実環境での収録音源なので、主に対象とした風鈴の音以外の周辺環境の音が多く含まれていたことによると考えられる。

2）性別

全般的に大きな差異は見られない。

3）施設滞在時間

短時間滞在の幼児には“不明”の発言が多く、長時間滞在の幼児は”人”の回答が多い傾向が見られた。

4）年齢（一年毎）

５歳児は“不明”の回答が多いことに見られるよう、曖昧な回答が多い。同時に、他の要因の回答が少ないことから、語彙のバリエーションが少ないことが伺われる。

5）年齢（半年毎）

年齢が上がるにつれて、“不明”に分類されている分かりづらい表現の減少傾向と“モノ”に関する回答の増加傾向が見られる。また、回答された言葉の種類も“人”、“モノ”、“場所”、とバリエーションに富んでいる。半年毎に分類してみても顕著なように、５歳と６歳とでは大きな違いがあると考えられる。

【F 野外オルゴール音】

1）全体

対象園では園庭でのオルゴール音を「食事当番が準備をはじめる合図」として用いている。回答結果には、そのねらい通りに認識されている回答も数名得られ、幼児にとって印象的であることが推測される。“場所”についての回答の多さ等、A室内オルゴール音と似た傾向がある一方で、“モノ”の回答も多い傾向が特徴的である。

2）性別

男児の方が“人”、“モノ”に関する回答が、女児は“場所”についての回答が多い傾向があるが、全体的にはあまり差がない。

3）施設滞在時間

短時間滞在の幼児には“場所”の回答が、長時間滞在の幼児は”モノ”の回答が多い傾向が見られた。

4）年齢（一年毎）

6歳児は“場所”や“モノ”についての回答が多く、“人”や“行為”についての回答は少ない。

5）年齢（半年毎）

年齢が上がるにつれて、“モノ”や“場所”についての回答が多くなる傾向がある。

H. 4－3. 考察

前節で示した個々の音源についての分析結果をふまえ、幼児の音環境認識について、3つの観点から総括して以下に述べる。

【年齢による違い】

◇5歳児と6歳児との間に、“モノ”についての回答傾向に大きな差がある。6歳児からは“モノ”といった具体的な言葉を用いた回答が増える傾向が示唆された。

⇒幼児期は言語能力の獲得段階であるが、語彙の用い方の変化等から特に5歳と6歳との間には大きな違いがあることが確認された。よって、言語発達の面からも5～6歳間は大きく発達する段階であることが推測される。

◇5歳児と6歳児との違いとして、さらに詳細に調べるために半年ごとに区切って分析した回答の傾向を分析すると、年齢が上がるにつれて回答に用いる言葉の種類が増え、より具体的な表現方法になる。

⇒幼児は、半年単位であっても言語能力等の表現力の発達が著しく、回答傾向が大きく異なること、具体的には用いる語彙の増加や、単語ではなく文章で状況を説明するように変化する、といった発達過程が見受けられる。また、具体的な回答内容からは、音に対する幼児の認識も発達に伴って変化すること、例えば保育施設において教諭が規則性等のある意味を持たせて発している音を、その意味づけとともに認識されていることが確認された。これは、園のねらった教育効果が現れていることを示唆している。

【性別による違い】

◇男児は“モノ”に分類される具体的な言葉、または“その他”（分類できない抽象的な回答）に分類される曖昧な回答が、女子は“人”など状況について説明するような回答や、“不明”（回答無し）とされた回答が多い。

⇒男児は直感的に具体的な物の名前を用いて回答しようとする傾向が見られた。一方で、女児は人や行為についての回答が多く、音の発せられる活動場面に関してその状況を説明しようとする傾向が見受けられた。

【施設滞在時間による違い】

◇長時間滞在の幼児の方が、“人”や“行為”といったある場面の活動を動的に説明する傾向が強く、短時間滞在の幼児の方が“場所”や“モノ”などの動きの要素の少ない定常的な言葉を用いる傾向が強い。

⇒滞在時間が長時間の幼児のほうが様々な状況で人と関わる中で多彩な状況に面しているので、人的要素を含んだ場面を説明するような回答である傾向が強いと推測される。

以上に述べたように、幼児の年齢や性別、施設滞在時間によって音環境の認識の仕方が異なる傾向にあることが示唆された。幼児の環境認識の発達には幼児の過ごす環境の影響が大きく、教育的観点からも幼児施設の環境が与える影響は極めて大きいことが指摘できる。

H. 5 まとめ

保育施設における幼児の音環境認識の調査をおこなった結果、幼児の回答した言葉の大半は“モノ”、“人”、“場所”、“行為”の４つに分類できることから、音に対する認識は、その状況とともに認識されていることが示唆された。施設での音環境は、音刺激としてのみ認識されているのではなく、ある状況（場面）における音、として意味付けされて認識されていると推察できる。

音に対する回答の仕方としては、音源の名前を当てようとするのではなく、その音を聞いた状況を口述する傾向が見られたことから、幼児は環境全体の中からある要因、例えば本研究における音要因のみを抽出しているのではなく、空間のあらゆる要因を包括的に捉えて認識していることが示唆された。

また、音クイズ実施時において、幼児は自分自身の身近にある音について、より確信的に回答する傾向が見られた。提示音では「D セロハンテープを千切る音」がそれにあたり、自身の活動に伴って発生した音についてより印象的に認識していることが推測される。

以上に述べた点から、例えば音環境に着目した教育環境づくりとしての取り組みを行う時には、①実施環境として他の環境因にも同様に配慮すること、②意味づけをおこなうこと、③大人とは異なった観点を持って幼児の身近での音環境に配慮すること、等が重要であるといえる。

心身ともに発達過程にある幼児にとって、発育環境は非常に重要な要因である。多くの幼児が生育の場としてふれあう保育施設が担う役割は大きく、後の成長に著しい影響を与えることを考慮すると、人的環境、物的環境の各々の面から包括的に環境づくりに取り組むことが重要である。

今後は、年齢などの発達に応じた音認識の獲得過程を調査する方法を検討し、保育施設において実践的に取り入れられる教育環境づくりを音環境の側面から提案してゆく所存である。

参考文献

1) 関沢勝一，佐藤直樹：乳幼児保育施設と音環境，音響技術，Vol.27，No.3，通号 103，pp.9-11，1998.9

2) 志村洋子，藤井弘義，他：幼稚園・保育所における保育室内の音環境 (1)～(9)，音響学会講演論文集，1996～2003

3) 野口紗生，小西雅，及川靖広，山﨑芳男：幼稚園における幼児の学習活動と音の響きとのかかわりに着目した音環境の把握，日本音響学会建築音響研究会資料，AA2009-27，2009.4

I. 保育者と幼児からみたコーナー保育環境の評価に関する研究

I. 1　研究目的

子どもが遊び場所である空間を選択する際の、影響要因は様々な領域で研究されてきた.

従来、こどもと空間の関わりに関する心理学の研究は、条件統制された実験から導かれる、子どもの空間認知能力の発達を調べるものが主流であった. 実験を中心とした研究方法は、発達段階により異なる子どもの特定の性質に着眼して、外部要素を排除する傾向がある. 環境心理学においては、質的な議論として、フィールドワークを主体とした研究も進められているが、実際の場所づくりに応用できる研究は稀で、本研究の場所づくりとしての参与はさらに確立されるべき立場である.

建築学の観点から保育施設を捉えると保育施設の環境を参照する資料として「建築設計資料集成　教育編」がある. そこには、11 個の幼稚園の図面が紹介されているが、具体的な家具配置が表現されているものは１つである. 全体的な空間の構成と計画は、図面から推し量ることは可能であるが、利用者が空間全体や細かな設えをどのように設置しているか、また、その空間をどのように評価しているかを知るための資料は見受けられなかった.

保育・教育側の観点から考えると、保育の場面や行為をケーススタディーとして、研究しているものは多く見受けられるが、子どもが環境を選択する観点で行われた研究は見当たらない.

本研究の意義は、保育施設における子どもと環境の関わりを、現場で働く保育者や幼児の視点を捉えようとアプローチをすることで、現場に則して、幼児と環境の関わりを解釈しようとしたことである.「環境」を物理的環境の側面からだけでなく、人的環境や施設運営側の教育上のねらいなど、単一の要因ではなくて複数の環境要因にも目を向けて、子どもと空間の関わりを考察することで、保育施設における空間の意味や価値を明らかにすることが本研究の目指すものである.

幼稚園・保育園において、恒常的にこどもが自ら遊び場所を選択できる事例は少ない. 本稿では、園児が場所を選択する時の環境要因について保育士と園児の視点から分析考察を行い、こどもが環境を選択する際の影響を明らかにすることを目的とする.

I. 2　調査・分析概要

I. 2－1　調査対象施設の概要

調査対象として、幼保一体型の「認定こども園　こどものもり」(幼・保それぞれの名称は「学校法人若森学園　まつぶし幼稚園」および「社会福祉法人桜福祉会　こどもの森幼稚園」) を選定した.

園児数は、保育園で満３歳児未満が２５名、３，４，５歳児が３８名（計６３名)、幼稚園で３，４，５歳児が１１３名である.

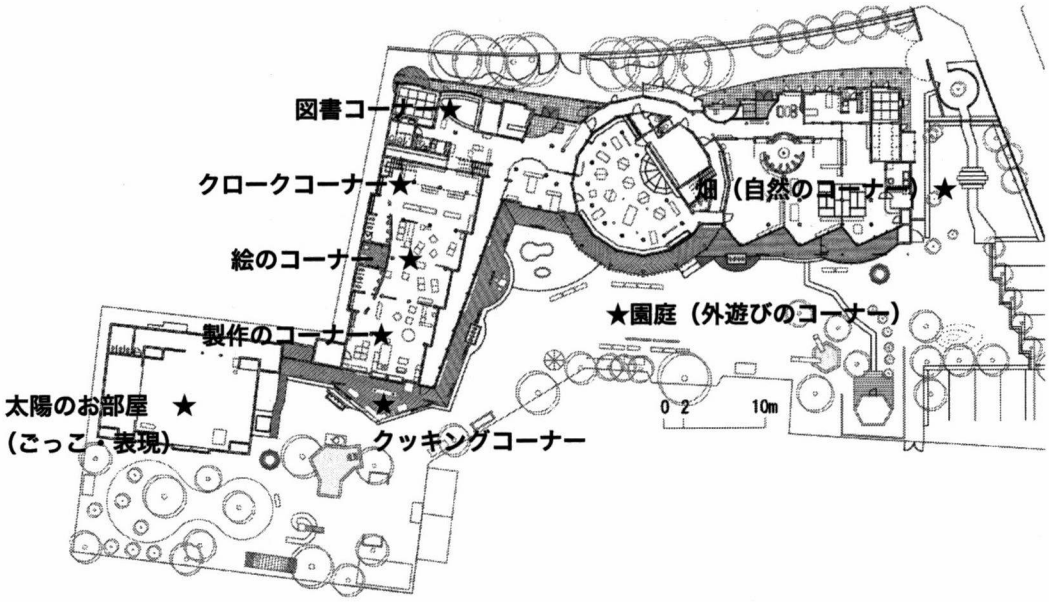
この施設の特徴として、異年齢保育システムとコーナー保育システムの採用があげられる. 異年齢保育の採用によって年少から年長の子どもが同じコース（クラス）に分けられ生活をしている. また、コーナーを園内各所に配置し、異なる年齢の園児が利用できるようにすることで、子どもは園舎全体を自由に行き来して、園児が異年齢で交わりながら、自主的に遊びを展開することができる.

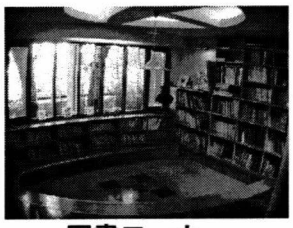
こどものもりで設置しているコーナーは、図書コーナー、クロークコーナー、絵のコーナー、造形（制作）のコーナー、ごっこのコーナー（太陽のお部屋)、表現のコーナー、外遊びのコーナー、飼育・栽培のコーナー（自然のコーナー)、クッキングコーナー（自然のコーナー）の９カ所である.（図表Ｂ１）

I. 2－2　調査方法

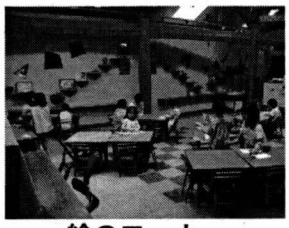
コーナー保育における子どもの場所選択の影響要因を調べるために２つの調査を行った.

調査Ｉでは、環境の設計者である保育者を対象に、定型自由記述式のアンケートを行った. そこで保育施設のコーナーの空間自体や遊具や道具等の環境が子どもにとって、どのように影響を及ぼすと考えているかを調査した. 調査Ⅱでは、園内の幼稚園児３歳～６歳児を対象に、園内のコーナーに関する写真や絵を貼った



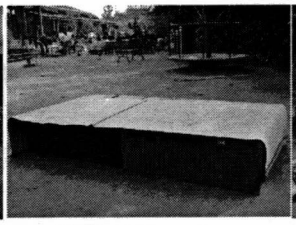

図書コーナー

クロークコーナー


絵のコーナー

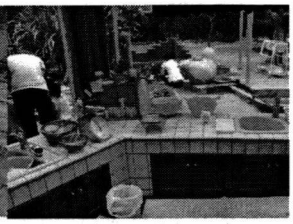
クロークコーナー

ごっこのコーナー


表現のコーナー

外遊びのコーナー

飼育・栽培の
コーナー


クッキングコーナー

図表Ｂ１　調査対象施設の配置図および各コーナー

ボードを選択肢として用いて、園児が好きな場所とその理由をヒアリング調査にて探った.

I. 3　調査Ⅰ保育者を対象とした環境評価自由記述アンケート

I. 3-1. 調査概要

保育者の視点から、こどもがコーナーにある遊具や設えとの関わりをどのように認識しているかを明らかとすることを目的とし、こどものもりの保育士(幼稚園・保育園いずれも）に以下のような定型自由記述と選択式のアンケートを実施した.

アンケートは2008年9月30日に配布し、2008年10月6日に回収した.

質問は予め調査者が任意で選択した6つのコーナー(図書コーナー、絵のコーナー、ごっこのコーナー、造形のコーナー、クッキングのコーナー、飼育・栽培のコーナー）と自由選択の1つのコーナーの計7つを対象とした. 上記の形式の質問を各コーナーで3問ずつ行った. また、各コーナー3問目の後ろに、「どちらとも言えないが気になる」を選択した際の理由を書くための自由記述欄を設けた.

○○○○コーナーについて
(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)は、(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿).
ので、子供にとって（良い/悪い/どちらとも言えないが気になる）。

I. 3-2. 分析方法

I. 3-2-1. 環境評価の傾向：良否の選択割合とその理由考察

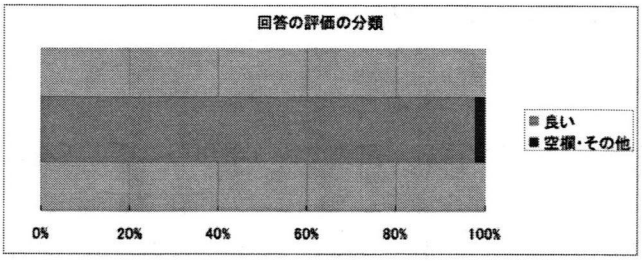
まず、アンケートで得られた回答を良い、悪い、どちらとも言えないの評価別に分けた. 図表C1のような結果になった.

総回答数：195

良い：191

その他の回答:4（どちらとも言えない1票、空欄3票）

・環境の評価に関する選択式設問対して、ほとんど全ての回答が子どもにとって「良い」という回答だった. その他の回答の例として、以下のような良いとも、悪いとも言えない評価が回答にあった.



図表C1　アンケートの回答評価（良否の割合）

「(包丁の）本物を使うことはよいと思うが同時に、とても危険の伴うことなので、十分な注意が必要.」

「(季節にちなんだ本のコーナーを別途に設け面題して並べられない」

I. 3-2-2. 分析と考察の方針

ほとんどアンケートの回答は環境を「良い」と判断するものであった. これは従来予測していた結果の傾向と大きく異なり、その後の分析方法も変化する必要が生じた. ここでは、なぜこのような回答傾向になったかを考察して、その後の分析の方針を示す.

○回答が「良い」に集中した理由の考察

1、評価者と環境の関わり

回答者は全員、保育者である. 保育者は環境を自分達で創る立場なので、自分達が考え、設定した環境に「悪い」評価を与えるのは、「提案なき批判」になってしまう. もし、悪い環境が思い浮かんでも回答しにくいと思われる. また、主体的に環境を良くなるように設計しているので、悪い環境は存在しないという認識をしていると推測される.

2、イメージから答える弊害

回答方法として、アンケート用紙を配布して後日回収する形式をとったが、保育士の方々は、実際に目で見た光景を評価するのではなく、コーナー保育の場面を思い出しながら回答をしてもらったと考えられる. 従って、実際に知覚したものでなく、保育者の認識から得た回答である. そして、あらかじめ環境に対してイメージが保育者の間に共有されていると考えられて、その共通認識が回答されやすい. 保育者が環境に対する悪いイメージを共有としているとは考えにくい.

3、回答しやすさの問題

今回の調査は、保育者の方々に自由記述式のアンケートだったので、選択式のアンケートと比べて、設問内容が抽象的で回答が困難であると思われる．環境の良い面は普段から意識しているので回答できたが、環境の悪い評価は、あまり考えない事柄なので出てこなかった可能性がある．

以上に挙げた３点などの理由回答が「良い」に集中したことに影響を及ばしていると考えられる．以上踏まえて、この調査で可能な分析と考察の方針を示す．

○分析・考察の方針

保育者は主体的に環境を設定、改変をしていく立場の人間であることを踏まえて、

今回のアンケート調査は、保育者がどのような認識で環境を設定しているか、どのよう

な環境が良い環境であると認識しているかを知ることを分析・考察の目的とする．

評価の軸や評価対象が何であるかを調べ、コーナー保育がどのような特徴があるかを分析・考察していく．

I. ３－３. 子どもにとって良いと思える環境と理由についての分析と考察

I. ３－３－１. 回答結果の分類方法と分析の手法について

保育者が環境を設定する上で、着目した対象は何かを知るためにまず、主語の分類を行う．また、その環境（要素）が子どもにどのような影響を及ぼしているものかを、あるいはどのような影響を狙っているのかを知るために述語を分類する．それぞれで抽出された要素が何であるか、要素同士がどのような関係であるかを分析していく．

I. ３－３－２. 主語の分類の定義

回答者が何に対して評価を行っているか着目している対象を抽出した．

評価対象は、具体的な物理的環境（遊具や部屋や設え）を対象にしているもの以外にも、その環境で行われる行動や、コーナーで共有されているルールや規範など抽象概念を評価の対象にするも回答多かった．

アンケートの説明には、「物理的環境」を探ることを目的としていると記載した．しかし、実際の回答にはそれ以外の要素も多く含まれているので、実際の保育者の認識を知ることが目的なので、今回は、物理的環境以外を評価した回答も含めて分析を行うことにした．

○主語の大分類

評価の対象となる主語を自由記述アンケートの主語を以下の３つに分類した．

A　部分的要素について

評価の対象が実際に子どもや保育者が個体として認識できるもの．個体が１つのものとして評価されているもの．

B　全体的要素について

評価の対象が１つの個体ではなく、指示するものの明確な範囲が分からないもの．

C　コーナー自体を評価について

A	設え、道具、遊具など物理的環境を構成する部分的要素の評価
B	雰囲気、配置、空間など物理的環境の全体的要素の評価
C	コーナー自体を評価

「コーナー」をそのものとして評価の対象としているもの．または、そのコーナーの機能や実際に行われる行動を評価したもの．

○主語の小分類

大分類に項目を各コーナーに分類を行った．次のページの図表Ｃ２にその分類したカテゴリーを掲載する．

I. ３－３－３. 述語の分類

○述語の小分類

回答中の述語に当たる部分から、環境を評価する言葉を抽出した．出現頻度が高い言葉や、意味が類似した言葉を評価内容ごとに小分類、中分類、大分類の３種類に分類した．

小分類を中分類が、中分類を大分類が内包する関係である．大・中・小分類の関係性は図表Ｃ３にまとめる．

図書のコーナー		お絵かき		製作	
A	部分的要素	A	部分的要素	A	部分的要素
A1	本の数	A1	中央の机	A1	廃材利用
A２	図鑑	A２	季節の花	A2	材料
A4	表示について	A3	絵を飾るボード	A３	リサイクルボックス
		A4	飾ってある絵	A4	表示
		A５	絵の用紙		
B	全体的要素	B	全体的要素	B	全体的要素
B1	段差			B１	道具の配置
B２	コーナーの位置			B2	空間
B３	本棚			B3	装飾・置物
B4	本を読むスペース				
B5	本の置き方				
C	コーナーを評価	C	コーナーを評価	C	コーナーを評価
C1	コーナー自体	C1	絵を描く行為		
C２	貸し出しをすること	C2	絵を描く状況		
		C3	絵を片付けること		
ごっこ		クッキング		飼育・栽培	
A	部分的要素の評価	A	部分的要素	A	部分的要素
A1	おままごと道具全体	A1	調理器具、包丁	A1	畑
A2	ドレスやバック	A2	食材	A２	木
A3	クッキングセット	A3	麦茶	A３	花
A4	表示				
B	全体的要素	B	全体的要素	B	全体的要素
C	コーナーを評価	C	コーナーを評価	C	コーナーを評価
		C1	料理	C1	動物の世話
		C2	料理（自分で経験）	C2	植物、野菜の栽培
		C３	料理（育てた野菜を使う）	C３	その他「育てること」
		C4	料理（食べること）		

図Ｃ２　主語の分類表

O コーナーが子どもにとって与える良い影響							
α 直接的に教育的な効果をもたらす			β 補助的に教育効果を高める				
Ⅰ 教育効果を与える			Ⅱ 主体的な活動の促進			Ⅲ 場を作るための仕組み	
A 心を育てる	B 社会的規範の習得	C 体験をする	D 内発的意欲を補助する	E 子どもだけで使える工夫	F 雰囲気を作る	G コーナーの仕組みの設定	H その他の要因
1 やさしさ	5 ものを大切にする	7 育てる楽しさを感じる	9 興味、関心付けをする	13 使いやすい見やすい片付けやすい	14 落ち着いた雰囲気を作る	15 成長が見られる。継続性がある。	18 選択性がある
2 責任感	6 道具の使い方の習得	8 食べる楽しさを感じる	10 想像・創造力の向上させる			16 家庭への応用になる	19 自主性を促す
3 五感・季節感			11 何かになりきる、集中力を向上する			17 コーナー間の関連性がある	20 リアリティー
4 交流・社会性の獲得			12 自信を持たせる。意欲を育てる				

図表Ｃ３　図表の分類表

○小分類（20 分類）

1 やさしさ /2 責任感　/3 五感・季節感 /4 交流・社会性の獲得 /5 ものを大切にする /6 道具の使い方の習得 /7 育てる楽しさを感じる /8 食べる楽しさを感じる /9 興味、関心付けを行う /10 想像・創造力の向上 /11 何かになりきる，集中力を向上する /12 自信を持つ．意欲を育てる /13 使いやすい、見やすい、片付けやすい /14 落ち着いた雰囲気を作る /15 成長が見られる．継続性がある．/16 家庭への応用 /17 コーナー間の関連性がある /18 選択性がある /19 自主性を促す /20 リアリティーがある

○中分類（8 分類）

A　心を育てる
B　社会的規範の習得
C　体験をする
D　内発的意欲を補助
E　子どもだけで使える工夫
F　雰囲気を作る
G　コーナーの仕組みの設定
H　その他の要因

○大分類（3 分類と 2 分類）

大分類は以下の 2 種類とした．

大分類 1（2 分類）

α　直接教育的効果をもたらす

β　補助的に教育効果を高める

大分類 2（3 分類）

Ⅰ群　教育効果を与える

Ⅱ群　主体的な活動の促進

Ⅲ群　場を作るための仕組み

I. 3－3－4. 分類の規模ごとに見る全体の評価傾向

○主語の要素と評価の関係

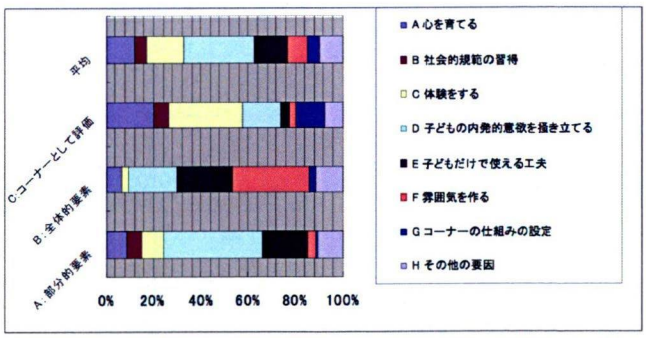
○考察のねらい

主語を対象の規模で分けることによって、コーナーの環境に対して、保育者の視点が何に向いて、どのように評価しているかの考察を試みる．

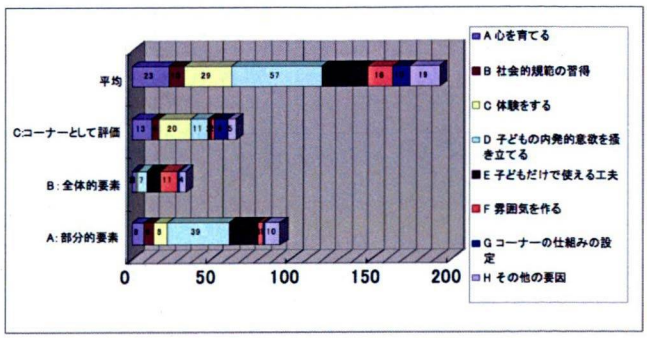
○評価傾向の分析

1、全体傾向

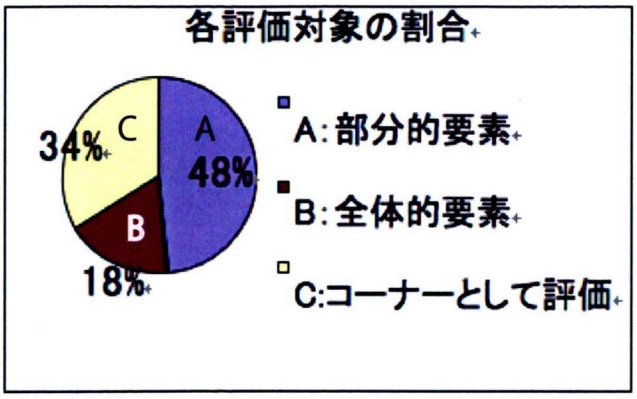
図表 7 より、回答の対象の規模の各割合は、部分的



図表Ｃ４　主語（評価対象）と評価内容の関係性（回答の割合）



図表Ｃ５　主語と評価の関係性（回答数）



図表Ｃ６　主語の分類別の割合

要素が48%で、約半分の回答を占めていた．次いでコーナー自体の機能を評価する回答が34%、全体の要素を評価する回答が18%

という結果であった．総回答数180個の中で、部分的要素を評価した回答が93個、全体的要素を評価した回答が22個、コーナーとして評価した回答が65であった．

○主語の要素別に見る述語の回答内容の傾向

１、部分的要素を評価している回答について

図表５，６から読み取れるように部分的要素を評価する回答93の個のうち、39の個の回答がＤ「子どもの内発的意欲を掻き立てる」に当てはまった．これは部分的要素を対象とした評価の42%であり、高い割合占めている．次いでＥの「子どもだけで使える工夫」が回答の20%を占めて、回答の約６割がⅡ群の「子どもの主体的な活動を促進する」効果を評価した内容であった．

２、全体的要素を評価している回答について

全体的要素では、Ｆの「雰囲気を作る」を評価した回答が最も多く３割を占めた．Ｄ「子どもの内発的意欲を掻き立てる」、Ｅ「子どもだけで使える工夫」もそれぞれ２割を占めた．全体的要素もＤ、Ｅ、ＦでⅡ群の「子どもの主体的な活動を促進する」効果を促進する内容が回答の７割を占めて、部分的要素と同様の傾向があるが、部分的要素は、Ｆの「雰囲気を作る」という評価がなくＤとＥで構成されているのに対して、全体的要素はＤ、Ｅ、Ｆが一定の割合を占めて分割されている．

３、コーナーの機能を評価している回答について

約３割の回答がＣの「体験をする」に当てはまり最も高い割合を占める．部分的要素、全体的要素の評価の内訳と比較して、Ａ「心を育てる」Ｃ「社会的規範の習得」Ｇ「コーナーの仕組みの設定」の評価項目が全体に占める割合が高い．部分的要素、全体的要素で多くの回答が評価していたⅡ群に当たる「子どもの主体的な活動を促進する」Ｄ「子どもの内発的意欲を掻き立てる」、Ｅ「子どもだけで使える工夫」、Ｆ「雰囲気を作る」の割合は低い．

○考察

１、部分的要素と全体的要素の視点の違い

部分的要素は物に対して具体的に期待する効果の意味が具体的なＤ、Ｅに評価が集中した．しかし、全体的要素は物の集合を評価したものも含めているので、部分的要素と全体的要素の区分は不明確な部分があるので、部分的要素にもＦ「雰囲気を作る」という全体的要素と対応しやすい抽象的な効果を評価されていると考えられる．

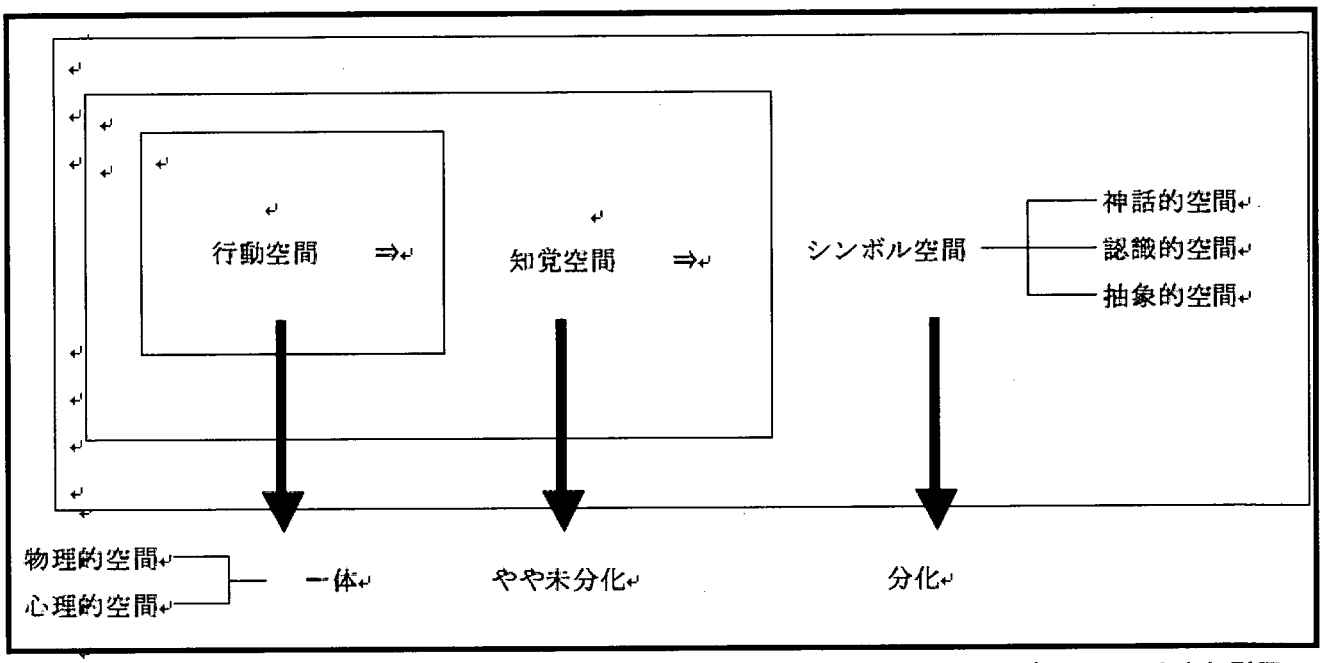
２、コーナーを評価する回答と部分、全体の要素を評価する回答の視点の違い

部分的要素、全体的要素はⅡ群の「主体的な活動を促進」に当たる評価の回答が集まり、一方、コーナーそのものとして評価する内容にはⅡ群を評価する内容のものは少なく、Ⅰ群の「教育効果を評価する」回答が集まった．この差異は、部分的要素、全体要素とコーナーとして評価したものが対象とする「環境」の性質の違いに起因しているのではないかと想像される．

私は、部分的要素、全体要素が評価する環境とコーナーとして評価をする際に対象とする環境に視点の違いがあると考えている．

以下に「空間に生きる（1995　北大路書房）」12章の図表Ｃ７を引用して説明をする．

参考文献では、哲学者や心理学者が扱っていた空間が、それぞれどのような性質であるかが言及され、空間の性質の違いを整理するためにこの図が用いられている．しかし本研究のこの考察では、引用文献中で展開され



図表C7　空間の分類（Cassierer E., 1994を参考に加藤が作成）空間に生きる12章，P232より引用

る議論の関心とは異なるので、図のみ拝借して、詳細な説明は割愛させてもらう.

さて、部分的要素と全体的要素は、先に定義したように、保育者が具体的な物を目で知覚して評価したものなので、この図表C７上では「知覚空間」に当たる. それに対して、コーナー自体の評価は、保育者が目的を持って設定した空間で期待される効果を評価したものなので、これは、実際の現実世界で体験される行動空間でもなく、保育者が実際に眼で認知した知覚空間でもない. 抽象度の高いシンボル空間を評価したものに当てはまると考えられる.

この議論に従えば、各主語の要素の対象の違い（部分的要素と全体的要素を評価した回答に対して、コーナー空間を評価した回答）は、「評価している空間（環境）の性質が異なる」と言えるのではないか.

部分的要素と全体的要素を知覚空間であると考えると、「物理的空間と心理的空間がやや未分化」であると言える. 一方、コーナー自体の評価は、「物理的空間と心理的空間が分化」していると言える. シンボル空間は抽象的なものであり、心理的空間が評価されていると考えられるので、コーナー自体の評価は「物理的環境を含まない心理的評価」をしているものであると言えるだろう.

部分的要素と全体的要素を評価した回答は、人が目で知覚できるものを評価しており、「心理的評価を含めた物理的空間を評価している」があると考えられる.

さらに部分的要素と全体的要素の評価内容を比較検討すると、部分的要素の方が、「具体的に物理的対象」を評価しており、全体的要素の方がより「抽象度が高く、物理的空間を基に心理的空間を評価」していると思われる.

以上の事柄を便宜的にまとめると、図表C８のようになる. コーナー環境を評価する３つの主語の要素の違い

は、評価の対象が、具体（物理的環境）と抽象（心理的環境）のどちらに近いものかを表わしているかを示す指標ではないかと考えられる.

○分析のねらい

前節では、主語を中心として評価の関係を見たが、この節では評価内容を対象にどの要素に関係があり、評価項目がどのような特性がるか考察する.（評価項目は、中分類と大分類を使用する. 3-3-3、及び図表C３を参照.）

○評価内容の内訳

主語の対象の分類	部分的要素	全体的要素	コーナー自体を評価
回答の特徴	対象が個体	対象の範囲が不明確なもの	コーナーの機能や行動が対象
視点の違いから生じる空間の評価の特性	保育者が知覚した物理的空間を中心に評価	保育者が知覚した物理的空間を中心に評価	保育が思い描く心理的空間を中心に評価
主たる評価内容	子どもの意欲を掻き立てる工夫を中心として、子どもの主体的活動を促進させる仕掛けが多い。	空間の雰囲気を作る機能など抽象的要素を含み、子どもの主体的活動を促進させる内容が多い。	コーナー保育がもたらす直接的な教育効果を評価することが多い。

図表 C8　回答の主語の要素の分類について

図表Ｃ１１を見ると、最も多くの回答内容を占めているのは、Dの「内発的意欲を掻き立てる」で約30%を占めた．その他の分類の回答は５～15%で、特に著しくその割合が高かったり、低かったりするものはなかった．評価内容をもっと大きな部類で見ると、Ⅰ群の「教育効果与える」が32%、Ⅱ群の「主体的な活動の促進」が57%、Ⅲ群の「場を作るための仕組み」が19%であった．

○評価項目別に見る傾向の考察

１、Ⅰ群「教育効果与える」の評価内容について

図表Ｃ９、Ｃ１０を見ると、Ⅰ群の「教育効果与える」に当たるA「心を育てる」B「社会的規範の習得」C「体験をする」は主語がコーナー自体の評価の割合が高く、A、B、Cそれぞれコーナー自体が評価する割合は、それぞれ57%、40%、68%と高い割合である．物理的評価よりも心理的評価として捉えられていることが分かる．

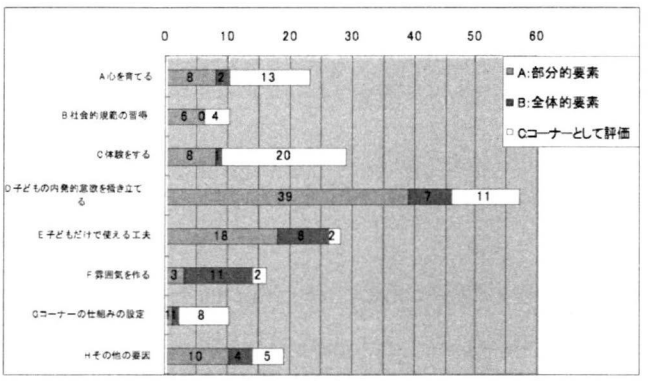
２、Ⅱ群「主体的な活動の促進」の評価内容について

同様に図表10,11を見ると、Ⅱ群「主体的な活動の促進」に分類されるD「子どもの内発的意欲を掻き立てる」、E「子どもだけで使える工夫」、F「雰囲気を作る」は総じて、コーナー自体を主語として対象とする回答は少なく、部分的要素と全体的要素を主語とするものが大半を占めた．Ⅱ群の「主体的な活動の促進」する環境は専ら物理的環境を対象として評価したものが多いと考えられる．部分的要素と全体的要素の占める割合がD,EとFで異なり、D,Eは部分的要素を対象に、Fは全体的要素を対象としている回答が多い．Ⅱ群の回答は物理的環境を対象として評価したものが多い．

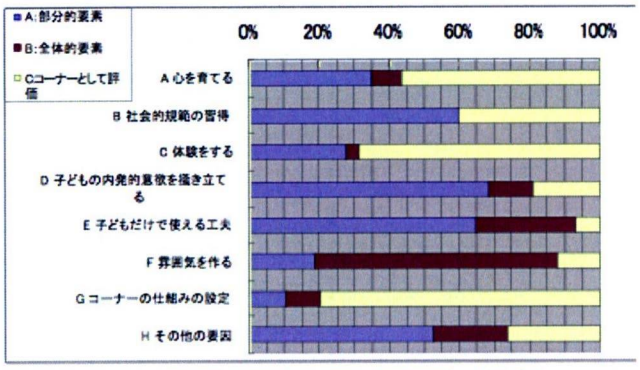
３、Ⅲ群の「場を作るための仕組み」の評価内容について

G「コーナーの仕組みの設定」はコーナー自体を評価対象としたものが多く見受けられた．H「その他の要因」の主語の対象は、３つともほとんど均等に回答が分布した．

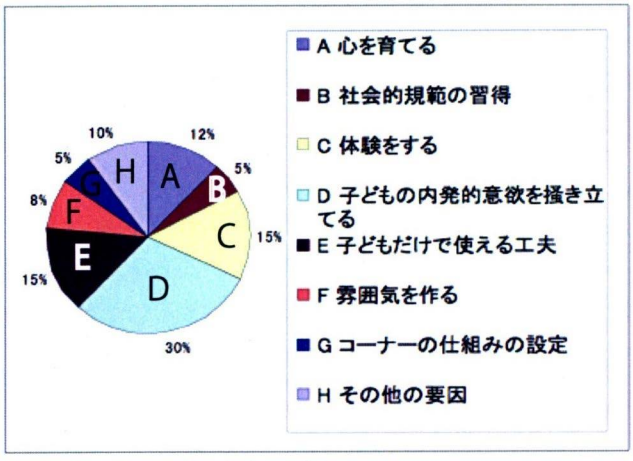
○考察



図表Ｃ９　評価内容と主語の関係性（回答数）



図表Ｃ１０　評価内容と主語の関係性（割合）



図表Ｃ１１　評価内容の内訳

環境の評価の分類を、主語の要素の割合の違いから、評価項目が物理的環境に由来した評価項目であるか、心理的評価に項目であるか、図表Ｃ１０を並べ替えて再整理する．３つの分類の多寡で分類した上で、評価項目が行動の主体者である子どもと物理的環境、心理的環境とどのように関わっているかを考察する．

１、コーナー自体を評価するものの割合が高い項目…A、B、C、G

A、B、C、G の４つの評価内容に共通することは、各内容を実現するためには、保育者の意図や援助が大きく関わり、子どもと周囲の物理的環境と子どもだけの関係性では、達成が困難なことも含まれていることである．

２、全体的要素が高い項目…F

全体的要素が高いのは、先にも触れた通り、Ｆの「雰囲気を作る」のみである．子どもと空間の関係なので、物理的環境として、子どもは直接空間に触れるが、子どもの心理や行動を規定する強さはないと考えられる．

３、部分的要素が高い評価…D、E

部分的要素が高い項目はＤ「子どもの内発的意欲を高める」E「子どもだけで使える工夫」の二つである．部分的要素に当てはまる個々の遊具や道具を対象として評価した項目なので、子どもと物の関係性を直接的に評価したものが多い．また、子どもが大人の手を直接的には通さずに、物と人の関係だけで形成されている．

以上に書いた要領で項目を並べ替えると図表Ｃ１１の形になる．図表Ｃ１２において、コーナー保育自体が評価対象となる度合いが高い程、保育者の意志が強く反映される評価項目で、低い評価内容程、物と子どもの関係性が環境の評価に強い関係があると考えられる．

見方を変えると、評価内容において、「心理的要素が強い」要素が上に位置して、「物理的環境の要素」が強い要素は下に位置している．

心理的環境の割合が高い評価内容は、保育者の意図が色濃く反映されており、実際に生じている現実の行動環境から離れて、「このコーナーはこのような効果を意図している」という規範性評価が行われているのに対して、物理的環境内容の割合が高い評価項目は、「実際に子どもがどのような動きをしたか」を目で見て評価している項目であると考えられる．

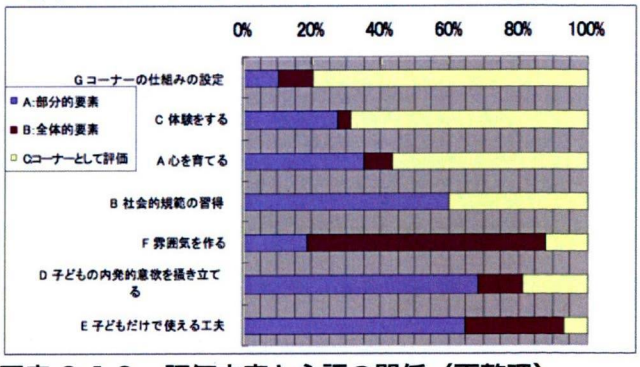
I. ３－３－５　コーナー全体規模で見る評価の傾向

○分析のねらい

コーナーと主語の対象の要素からコーナーの大まかな特性を見る．

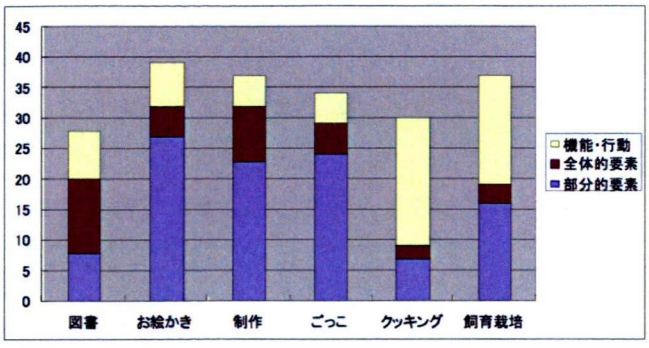
○分析

クッキングコーナー、飼育栽培コーナーは、コーナーに評価が集まった．図書のコーナーは、全体を対象と



図表Ｃ１２　評価内容と主語の関係（再整理）

した評価が集まった．お絵かき、制作、ごっこのコー



図表Ｃ１３　主語の対象とコーナーの関係性

ナーは、部分的要素を評価が中心であった．

○考察

クッキング、飼育栽培コーナーは保育者の援助することが多い場所であり、物理的環境よりも心理的環境を評価対象としていると考えられる．また、二つとも自然環境を評価対象に含むコーナーなので、明確な物理的環境では指示できない、心理的環境が対象として捉えられている空間であると考えられる．

お絵かき、制作、ごっこのコーナーは、部分的要素が評価の対象として多く挙げられている．こども自身が場所を選択して、主体的に判断するので保育者の存在よりも物理的環境に関係性が強い環境である．

図書コーナーは全体的要素が強い空間である．部分的要素やコーナーとしての評価も主語の対象としてある程度の割合を占めている．本を読む空間の存在として評価されている．

I．３－３－６、　コーナー別の評価の傾向

●コーナーと評価内容の関係

○分析のねらい

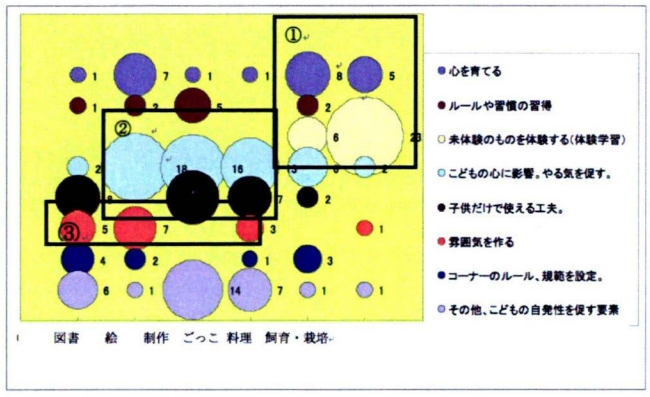
　コーナーの違いによって評価の内容がどのように関係するか考察を行う．

　コーナー間に共通する評価の傾向を見だす

○考察方法

　チャートの円の大きさで、各コーナーにおける評価内容の分布の多寡を見る．その偏り方で、コーナーの特性とコーナー間の関連性、類似性を見だす．

①体験をする空間



図表Ｃ１４　コーナーと評価内容の関係

　クッキングコーナーと飼育栽培のコーナーは特性が評価内容も空間の特徴としても類似している．図表Ｃ１４から読み取れる傾向として、「体験学習」と「心を育てる」など教育効果があることが評価されている．しかし、「子どもだけで使える工夫」や「雰囲気を作るなど」子ども主体性を促す効果はあまり持っていない．二つのコーナーの物理的な共通点としてはどちらも外にあるので、空間に仕切りがないことが挙げられる．空間に仕切りがないので、他の室内の環境で共通する評価の傾向と異なる傾向があるのかもしれない．

②子どもの主体的な活動を促すコーナー

　制作、絵、ごっこのコーナーは②の範囲にある評価が高く、子どもが自分自身で活動をすることを重視しているコーナーであると考えられる．３つともにコーナー内で行われる行動の枠は、コーナーによって規定されているが、毎日行く絵のコーナー以外は、そのコーナーを選択するかを決める場所の選択の自由と、そのコーナー内で何を作り、描き、演じるかを決める行動の選択の自由がある．この３つのコーナーは、何をするの個子どもに自由な選択肢があり、子どもは選ばないこともできるので、自主的な行動を促す工夫が多くなされている．

③行動に集中させる、落ち着かせる工夫

コーナー保育はこどもに何をするか選択肢が多いので、１日に多くの環境で遊ぶことも可能であるが、コーナーによっては、１つのもに集中して取り組むことに意味を成すコーナーが存在する．図書、絵、ごっこのコーナーはそれに当てはまり、「雰囲気を作ること」が重視されている．保育施設には１つのコーナーで行動を

集中させる「静」の空間もあるけれど、外遊びや表現など体を動かすことに意味がある遊びもある．ごっこの遊びには静の要素必要だが、同時に動の要素も必要とされると考えられるので「雰囲気を作る」評価は他の二つのコーナーよりも低めで他のこどもの自主的な行動を促す評価も重視されていると考えられる．

I．4　調査Ⅰのまとめ

○調査Ⅰで分かったこと

・コーナー保育は、定められた機能に集約するために環境を作り出していると考えられる．なぜならば、コーナー保育の環境評価の内容は、教育効果を得るという目的に対して、収束可能であるからだ．

・各コーナーの詳細の分析から、コーナーの中には、多様な物がある場合もあるが、同じコーナー内の違う要素でも、実はそれぞれの評価がひとつの目的や意味に収束するものも多かった．例えば絵のコーナーで季節の装飾と子どもがうまく描けた作品を飾るボードは、一見二つに何も関連性がないように見えるが、実は描くことに意欲を持ってもらうための工夫であることなど多くの例が挙げられる．

・また、１つのものに対して複数の意味を持っているものも存在する．

・環境を評価する内容は、現状を実際に目で見て実感する物理的環境を評価する軸と、保育者が期待している教育効果を心理的環境に評価する軸に分けられる．

・アンケートで得られた子どもにとって良い環境の評価内容は多様であるが、評価項目が、心理的環境と物理的環境のどちらに寄与しやすいかで分類が可能であり、保育者がコーナーをどのような視点で捉えているかを知るための一助になると思われる．

・コーナーごとに規定される行動は異なるが、評価内容の分布が類似しているコーナーがある．

I．5　園児からみたコーナー環境評価～選択式ヒアリングによる分析～

I．5－1．調査概要

子どもがコーナーを選択する際の影響要因を探ることを目的とし、自由保育の時間内に園内で遊んでいる３歳～５歳児にランダムに声をかけ、聞き取り調査を行った．園児に２枚のボード用いてどのコーナーが好きであるかを聞く、可能な場合はその理由も聞いた．

園では、頻繁にイベントが開催されて、調査日の違いによって起こるイベントなどの要素が子どもの心理に影響を及ぼすと考えられるため、複数の調査日（11月１０、１１、１２、１３、１７、１８、２０、２５、２６日）を設定した．

調査時間は主に自由保育の９時20分～11時30分とした．

○質問項目：Ⅰ、自由保育の時間中に５歳児に８つのコーナーの写真を提示して

「どのコーナーが好きか？」を写真で提示して指差してもらう．

(用紙Ⅰを使用)

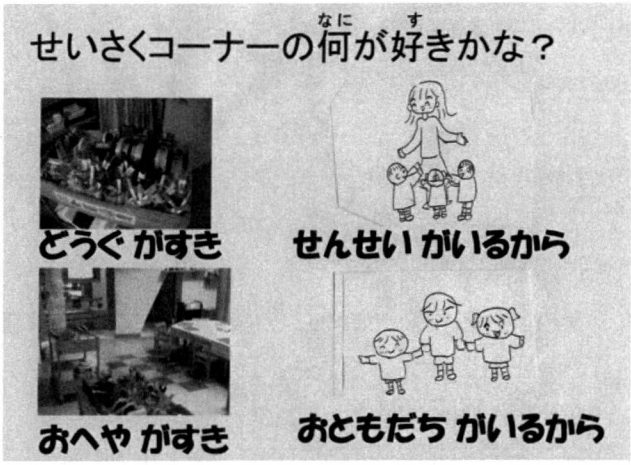
Ⅱ、選択してもらったコーナーがどうして好きかを４つの選択肢から選んでもらう．(用紙Ⅱを使用)

○記録した項目：こどもの名前、学年（服の色)、質問Ⅰの回答、質問Ⅱの回答、回答場所、その他の特記事項（子どもが答えた時の様子や、発言について）

I．5－2．属性の違いとコーナーの選択についての考察

I．5－2－1．全体的な傾向

◇外遊びを選択する回答が多く、全体の３割を占めた．次いで制作、ごっこ、表現のコーナーを選択する子どもの数が多く、子ども自身がコーナーの中で、遊ぶ内容を選択できるコーナーが選択される結果となった．



絵本、お絵かき、自然、キッチンなどの、保育者の援

助の必要性の高いコーナーは回答の割合が低い傾向になった.
子どもたちは、自分達で遊びを展開できるコーナーを選好していると言えると考えられる.

◇子どもに選択してもらった好きなコーナーを、選択した理由を写真付きの４択のパネルにて回答してもらった. 回答の結果、４つの回答の中で、最も「友達がいるから」を選択した子どもが多く全体の約４割を占めた. 先生を選択する子どもは少なかった.

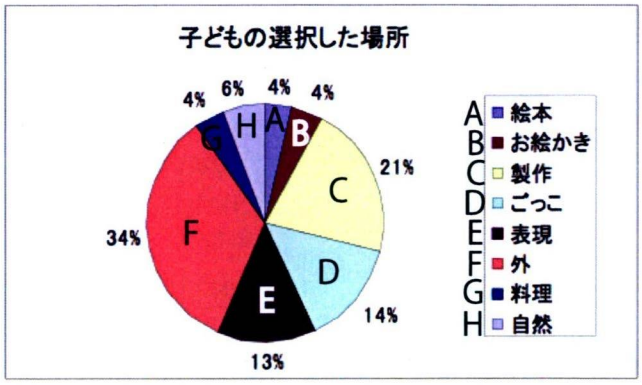
◇「場所が好き」「道具が好き」を物理的環境、「先生がいるから」「友達がいるから」を人的環境と定義する. こどもがコーナーを選択した理由を、物理的環境と人的環境の占める割合で比較すると、両者共に約50%であった. 今調査において、物理的環境と人的環境は両方共に子どもの遊び場所の選択に影響もあると考えられる.

◇人的環境の内訳は、先生よりも友達の存在を子どもたちはコーナー選択の理由として挙げている. 各コーナーが開かれている時には、子どもを見守ったり、援助したりするなど、その時に応じた役割を果たすために、各コーナーに先生は必ず存在している. 友達と先生は、こどもにとって社会的立場が異なるから、常に遊び仲間になる友達を選好したと考えられる.

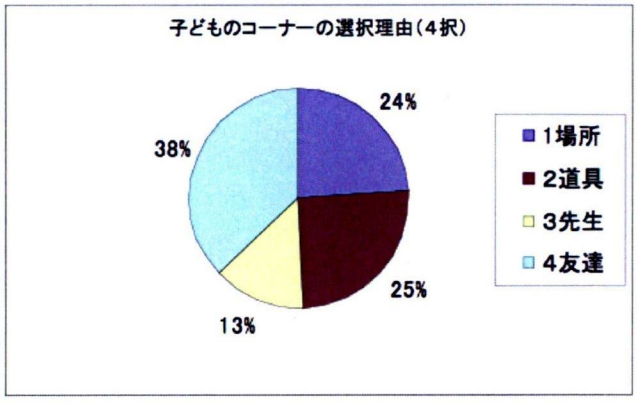
◇物理的環境の内訳は、場所と道具それぞれ、25%、24%と同程度の割合であった. このデータを見る限り子どもは場所選択をする際に、コーナー空間を総合的、全体的にを捉えて選択する理由としているのか、道具や遊具に着目しているのかは分からない.

Ⅰ. 5－2－2. 男女による選択の違い

◇コーナーの選択を男女別に見る. 男子も女子も全体から見た傾向と同様に、外遊びのコーナーが最も選好されて、次いでコーナー内で遊ぶ内容を自分で選択できるコーナーである制作、ごっこ、表現コーナーが選択されて全体に占める割合も高い. 残りの他の４つの選択肢よりも多く回答された傾向に変わりはない.

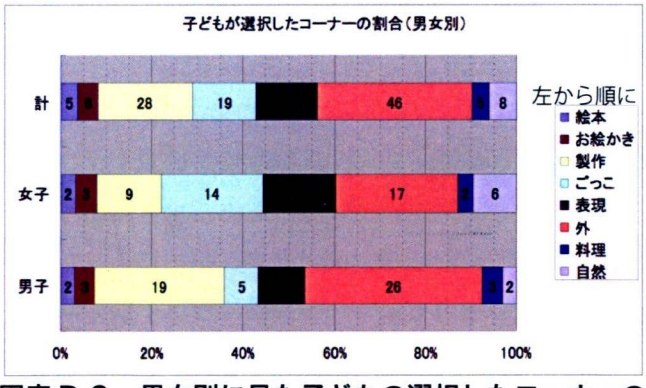


図表Ｄ１　ヒアリングで子ども選択したコーナー



図表Ｄ２　子どもが選択したコーナーの回答理由

◇ただし、４つの中の回答の内訳に男女の差異が読み

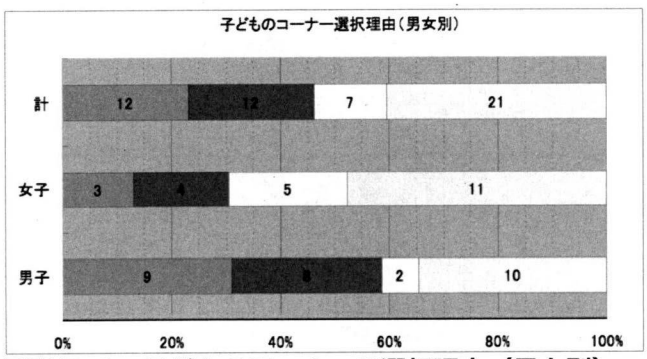


図表Ｄ３　男女別に見た子どもの選択したコーナーの割合（男女別）

取れる. 男子は外遊び、制作が、女子はごっこ、表現のコーナーを好む傾向がある.

◇全体的に回答の割合は類似している中で、女子の方が「先生がいるから」を選ぶ傾向が高いと言える.

男子の「先生がいること」の回答は約7%である. 一方、女子の回答は人的環境を選択した割合は約21%で３倍の差がある. 回答数自体が少ないために、一回答が占有する割合が高く、回答の傾向の高低の比較を



図表Ｄ４　子どものコーナーの選択理由（男女別）

言及することは難しいが、男女間の回答数を比較すると、「友達がいること」がほぼ同数（男 10、女 11）である以外に、「先生がいること」だけが女子の回答が多かったことから女子の方が「先生がいるから」を選ぶ傾向が高いと言えるだろう.

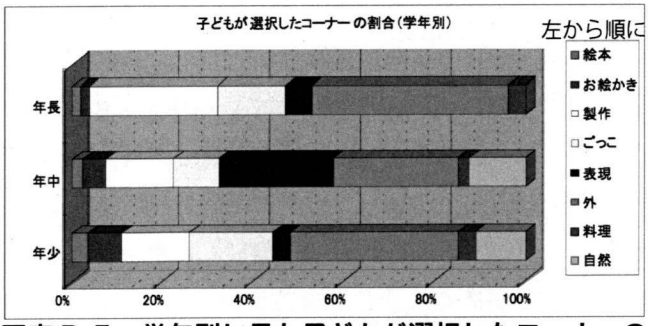
他の影響要因によって、女子に「先生がいるから」の回答が多くなった可能性もあるので、問いⅡで「先生がいるから」を選択した子どもの、属性を右の図表に示す.

年中の子どもが多く答える傾向はあるが、問いⅠで回答したコーナーにばらつきがあり、子どもが特定の先生を好きだから回答した訳ではないことがでが分かる.

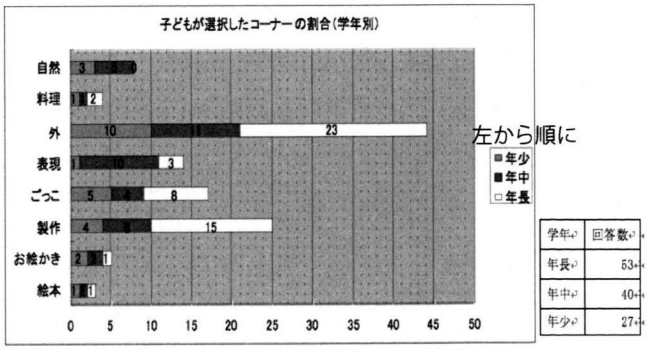
Ⅰ．5－2－3．　年齢による選択の違い

◇年齢が低くなるほど、有効な回答が少ない.

調査方法として、遊んでいる子どもができる限り、子どもが落ち着いた状態で聞いたが、指示に応じた回答を得られない場合もあった．発達段階上の問いに応じた答えを回答できるかの問題もあるが、ヒアリングの最中に他の事に興味を持ってしまい、こちらの意図と反した反応をする場合も多かった．従って、有効な回



図表Ｄ５　学年別に見た子どもが選択したコーナーの違い（学年別にコーナー選択の割合を表示）



図表Ｄ６　学年別に見た子どもが選択したコーナーの違い（コーナーごとの回答数を学年の罪上げで表示）

答数は年齢が高くなるほど高くなり、回答の信頼性も年齢が高くなるほど高いと言える.

◇年中（４～５歳児）の子どもはの好きなコーナーは分散する.

図表Ｄ５から、年少と年中の園児が各コーナーを選択した割合の傾向が類似しているが、年中のみ各コーナーに回答が分散している傾向が見られる.

常に機能しているわけではない表現のコーナーの写真に反応して、選択している園児が多い．これは、上記のグラフには反映されていないが、子どもがヒアリングの際に、好きなコーナーを二つ答えてしまった数から分かるので以下にその考察を記す.

調査者が好きな場所を１つ選ぶようにと質問したのに対して、子どもが複数の場所を指し示す事も多かった．分析を行う際に、複数回答のものはデータとして含めなかったが、子どもが空間をどのように認知しているかを知る上で、複数回答の場合を含めた子どもの反応を忠実捉える姿勢が必要であると考えられる.

図表Ｄ７は年齢とコーナー別に複数回答の多寡を色の違いで表したものである．表中に示す括弧外の数字が、質問Ⅰに対して、１つの回答を得られたデータの数字であり、括弧内の数字は複数回答も含めたものである.（全て好きと答えた場合の回答は含めていない.）

学年別に複数回答の多さを見ると、年少の子どもが23％に対して年中の子どもが47％であり、年中の子どもの複数回答が際立って多いことが分かる.

この結果を子どもが質問の内容を理解できて、回答できたかという観点で考えると、質問に対して正確に

	絵本	お絵かき	制作	ごっこ	表現	外	料理	自然	合計	※複数回答率
年長	1	1	15(17)	8(9)	3(1)	23(27)	2(3)	0	53(62)	0.15
年中	1(10)	2(7)	6	4(7)	10(13)	11(22)	1(4)	5(6)	40(76)	0.47
年少	1	2	4	5(9)	1	10(14)	1	3	27(35)	0.23

赤ー複数回答５つ以上の項目　オレンジー複数回答１～３つの項目　黄色複数回答１つの項目

※括弧内の数字は単一回答と複数回答の和　　※｛(複数回答率) ＝ (複数回答) / (単一回答＋複数回答)｝

図表Ｄ７　年齢別に見た質問１で複数回答した子どもの数

答えられる割合は、年少の子どもよりも、年中の子どもの方が高く、複数回答率は学年が上がるに連れて減少すると考えるのが自然だろう．しかし、年中子どもの複数回答率の方が高くなった．その理由として、年少の子どもは、選択肢全てを選択する場合や、無回答の場合が多く、このデータがそれらを含めていないからと考えられる．

実際に、調査中に年少の子どもは、どのコーナーが好きかということよりも、どの写真がどこに対応するかを確かめることを当てることに興味を持っていると思われる姿を多く散見された．そして、年少の子どもはどのコーナーが好きかという主体的な判断を即決することは難しかった．これは、自分自身の外の世界を大人のように認知している訳ではなく、空間を把握する能力が未熟であるからだと考えられる．年少の子どもは自分自身の意思で主体的に場所を判断している訳ではなく、保育者や他の友達の誘導や物に誘導されるのだと予測される．

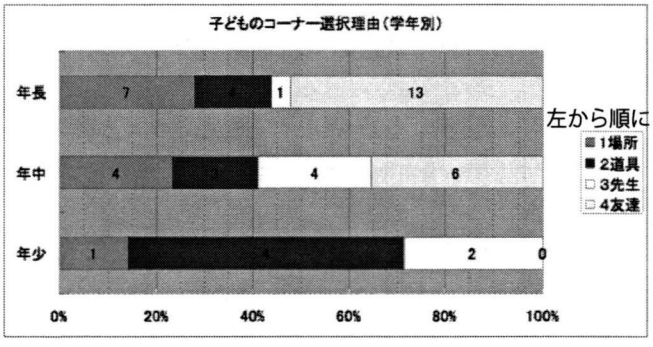
年少の子どもが主体的にコーナーを空間として認知して判断するのが難しいと考えられたが、一方、年中の子どもは、写真がどの空間であるかは容易に認識して、多くのコーナー空間に興味を持っていると感じられた．また、年長の子どもは、質問をしてから返答が速く、自分の言葉で好きな理由を説明できる子どもも見受けられた．自主的な意思を持って空間を選択していると考えられる．

次に単一の回答が多かったコーナーと複数回答が多かったコーナーを年齢別に比較する．年長のこどもは、単一の回答数が多いほど、複数回答も同様に多い傾向が見られるが、年中の子どもは、そのような傾向が見られず、単一回答では少ないお絵かきのコーナーや絵本のコーナーでも、複数回答が多く、年中の子どもの好きなコーナーの選択は、各項目に分散する傾向が見られた．

年中の子どもは、自主的に好きな空間を判断できるようになり、多くの場所に興味を持つようにったと考えられる．そして、コーナーでの遊びの経験と空間の認知能力の発達を経て、年長の子どもは、自分自身で遊びを展開できる外遊びや制作やごっこのコーナーを主体的に選択するようになるのではないかと考えられる．

◇データ数は少ないが、学年別に子どもがコーナーを選択する際の理由には明らかな違いが見れた．

◇年少の子どもは、物理的環境の選択肢を選ぶ傾向があり、「道具が好き」を多くの子が選択した．今調査では、友達がいるから選択する子どもはいなかった．年中の子どもは、人的環境と物理的環境が選択される割



図表Ｄ８　学年別に見た子どもがコーナーを選択する際の違い